

授業の様子

各学年1本ずつ
6本の授業が公開
されました。



平成最後の学習研究会!!

なしょうい新聞

号外

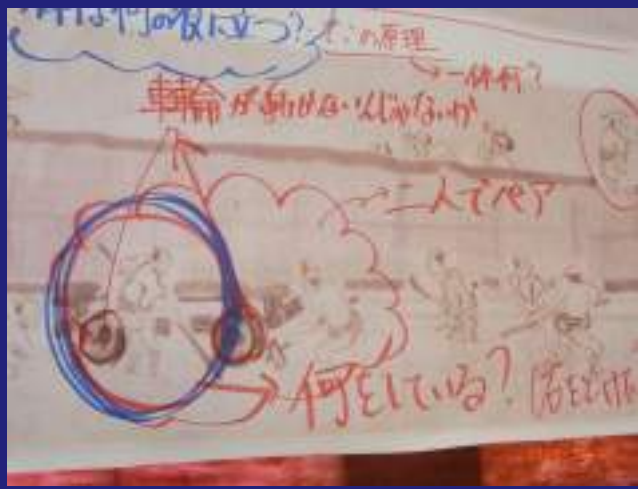


鳴川教科調査官も奈良へ

すごいぞ 済美小

学びへのしかけ、半端ないって!

こうりょうこびきず 大仏殿虹梁木曳図より



済美小学校の研究の目玉の一つが、カリキュラム・マネジメントの視点からの単元構想である。日常との関連、他教科等との関連、地域の特性との関連の三つの視点から、それらを生かした理科や生活科の学習を展開できないかを考え、単元構想されていた。特に、地域との関連では、昨年度の夏期休業中から職員で済美小の近くにあるお店やお寺などを訪ね、理科や生活科につながるものはないかと探された。

訪問し、木桶に食塩が析出していることに着目し、学習が展開されていた。さらに、六年生では、世界遺産学習(※1)で調べてきた東大寺に残る「大仏殿虹梁木曳図」から学習が展開されていた。

地域の特性を生かした
カリキュラム・マネジメント

なお、新聞執筆に当たっては、当日に配布された資料(冊子)を基に作成した。また部分的に引用させていた。冊子には、各学年の「理科(生活科)」と他教科との関連図が表で整理されたものが載っていた。

大切なのは 学級経営

※1 奈良市独自で行っている事業。各校で五年生の総合的な学習の時間で行う。



個の成長が
深い学びへ

済美小で大切にされてこられた二点目は、学級経営を土台とし、その上での「個の成長」である。主体的学び、対話的な学び、深い学びが成立するには、個が成長しなければならぬと考えられた。そして、個が成長するには、児童が主体的に自然の事象・現象に関わることに大切と考え、日々の朝の会のスピーチのテーマを自然の事象・現象に限定したり、全校挙げて自由研究に取り組みられたりされてきたようである。

何とも言える、誰とでも仲良くできるといった学級の雰囲気作りを朝の会(スピーチ)と授業で根強く指導され続けた結果、『友達にたずねる・たずねられたことにこたえる学級文化』が済美小に根付いていることがどの学年の授業を見られても感じられたに違いない。



音を聞いて 秋を感じよう

第一学年 (生活科)
『たのしもう あき』

夏の音と秋の音を聞き比べる活動を通して季節の変化に気付くとともに秋のイメージを広げようという授業であった。

事前に児童一人一人が虫の音を校庭で見つけ、ICレコーダーで録音するという活動を行っており、友達がどんな音を見つけたのかに興味を持って取り組んでいた。

また、本単元の取り組みは「音」に対する興味を深め、第三学年で新しく始まる「光と音の性質」の学習へつながっていくことを期待して行われた。

授業の後半では、グループに分かれて話し合い活動や、全体への発表が行われた。その際、ある児童が



秋の音を聞いて、寒そうだなと感じたと発言し、おたすねタイムが始まった。

「秋はどうして寒いと感じたんですか？」
「最近朝が寒いからです。」

「どうして昼や夕方ばかり考えなかったんですか？」
「昼とかは暑いからです。」

といったやり取りが児童同士で行われた。少しでも疑問に思ったことを流さないでおたすねする。友だちの意見に対して集中して聞く事ができているなど感じさせられた。

せつめいシート を活用して

第三学年 理科
『電気で明かりをつけよう』

「ピカッと光るピタゴラそうち」を作ろうという単元を貫く課題を設定し、ピタゴラ装置を作成するために、豆電球や乾電池、回路といったことを学んでいく単元構成がされていた。単元後半では、理科で学んだことを、図画工作の時間に作成することも明示されていた。

おもちゃを 仲間分け

第二学年 (生活科)
『つくろう あそぼう くふうしよう』

からくりおもちゃ館のおもちゃで実際に遊び、からくりおもちゃのふしぎさや面白さを感じさせた上で、当日の研究授業を迎えられた。

当日の授業では、前時までに作成したおもちゃがどんなものだったかをふり返り、おもちゃを素材や仕組みで仲間分けし、それを発表する段階を公開された。

自分の意見と比べながら友だちの発表を聞こうと教師が呼び掛け、おたすねを繰り返す中で深め合っていく様子が見られた。



ドライヤーの 中をのぞくと

第四学年 理科
『ものの温度と体積』



身近な生活の中から学習が始まり、学んだことを再び生活の場面で活用することにこだわって教材研究をされてこられたドライヤーの中にあるバimetalを利用したサーモスタットを授業でも使われていた。

実際にドライヤーのカバーを外したり、サーモスタットが作動している動画を見たりすることで、普段は見ることがないドライヤーの中にあるサーモスタットの役割を児童が実感していた。

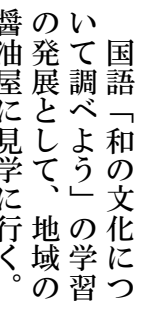
また、見るだけでなく、簡単サーモスタットを使って実験(※2)し、サーモスタットの仕組みを理解していた。

身の回りに金属の体積変化が活用されていることに児童が気付いた点や学習したことの有用性を実感できた点が非常に印象的な授業であった。

※2 豆電球の回路にバimetalをはさみ、バimetalを加熱すると豆電球が消える実験。

木桶の外に 大量の食塩

第五学年 理科
『もののとけ方』



国語「和の文化について調べよう」の学習の発展として、地域の醤油屋に見学に行く。そこで古くから受け継がれている木桶と出会った。木桶の外には結晶化した食塩が大量に付着しており、児童が興味をもつ。そして国語の学習から自然な流れで理科の学習へとつながっていく。この流れの中で学習が始まっているので、児童全員が主体的に問題解決に取り組んでいることが授業から伝わってきた。

さらに、問題解決を行っていく中で、一人一人の考えの違いや共通点を見だし、対立葛藤、強化、融合を

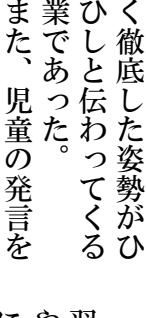
えて児童達に経験させることで納得できる見方や考えを導き出させるよう様々な手立てを加えられていた。

教師はあまり話さず、児童ら同士で意見を交えさせ、考えを深めていく徹底した姿勢がひしひしと伝わってくる授業であった。

また、児童の発言を構造化して板書することで学習テーマに迫りやすくしたり、無理に結論を出すのではなく、はっきりとしたこととしていないことを整理できるように話し合いの時間を十分に確保したりと、教師の工夫が光っていた。

棒の使い道を 探ろう

第六学年 理科
『てこのはたらき』



第五学年での総合的な学習の時間(世界遺産学習)や歴史の学習を通して身近にある大仏殿について、学習テーマを設定し詳しく学習を行い、その中で大仏殿虹梁木曳図と出会う。その中で、「23tという重さの柱を当時の人々がどのようにして宮崎から奈良へ運んだのだろうか」という単元を貫く本質的な問いが児童達の中で自然と設定されていた。

研究大会までに、済美小の先生方が重さ50キロの丸太を何個も用意し、児童達が実際に木曳図と同じように運んでみるという活動を行った。その時に使われた台車も中庭で展示されていた。

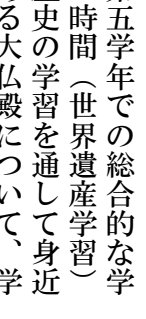
木曳図に描かれている棒はどのようにして使ったのか試行錯誤する中で、手応えの変化や台車の進み具合を体感したことを話し合う授業であった。総合的な学習から理科の学習へとつながっていく段階であり、この学習の導入であった。

二年後の新学習指導要領完全実施に向けて、我々教師も「この考えは〇〇的な見方だな」と考える習慣を身に付けなければいけないと考えさせられた。

また同じ事象でも教科が変わると、見方・考え方も変わるとも話された。「おいお茶」を授業で取り上げるとするとどんな見方・考え方があのかを例に他教科の様々な見方・考え方を紹介していただいた。

見方・考え方を働かせる

文部科学省初等中等教育局
教育課程課 教科調査官
鳴川哲也先生による講演も行われた。



学習指導要領の改訂のねらいや新指導要領で目指すものについてスライドを用いて丁寧に話され、参加者は熱心に聞き入っていた。

中でも、理科の各領域における特徴的な見方を整理して具体的に話されていた。

豆電球をもっと光らせるにはどうすればいいのかという問いに対して、電池の数を増やせばよいと答える子は量的な見方で考えているし、つながりを変えればよいと答える子は関係的な見方で考えている。といったように、児童の見方は様々である。しかし、授業で考えさせたい見方を絞ってあげるのが教師の役割であると話されていた。

また同じ事象でも教科が変わると、見方・考え方も変わるとも話された。「おいお茶」を授業で取り上げるとするとどんな見方・考え方があのかを例に他教科の様々な見方・考え方を紹介していただいた。

二年後の新学習指導要領完全実施に向けて、我々教師も「この考えは〇〇的な見方だな」と考える習慣を身に付けなければいけないと考えさせられた。

家庭
生活の営みに伴った見方・考え方
協力・協働
健康・快適・安全
生活文化の継承・創造
持続可能な社会の構築

社会
社会的な見方・考え方
位置や空間的な広がりの時期や時間の経過
事業や人々の相互関係

図画工作
造形的な見方・考え方
「形や色など」
「形や色の感じ」
「形や色などの造形的な特徴」

国語
言葉による見方・考え方
言葉のニュアンス